

ごめんと いえんだ

ほんだ ゆうき

まえ

ぼくが しゅんたろうくんを

かいだんの ところで おしたら、

しゅんたろうくんは、ころんで しまった。

しゅんたろうくんが、ぼくの おなかに

ばんち した。

そして、けんかになつた。

ぼくも、ばんちや きつくを してしまった。

かいだんの ところで

ないている しゅんたろうくんを みながら
かいだんを おりていった。

たいいくかんに いった。

そして、

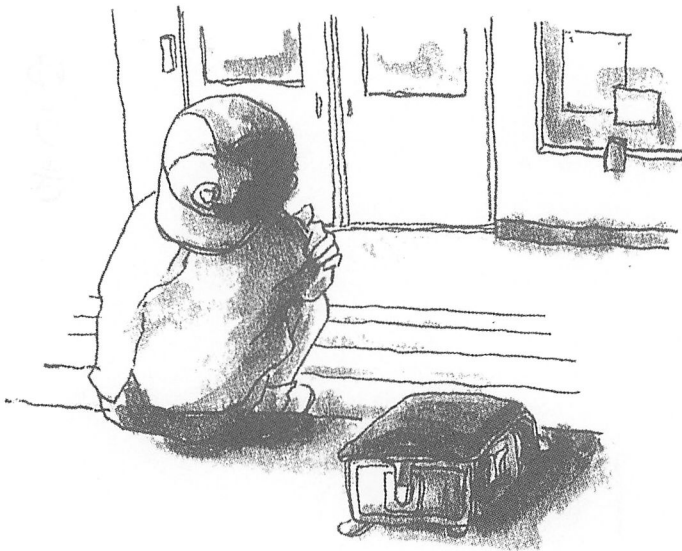
「しゅんたろうくん だいじょうぶかな。」
と おもった。

そして、

きょうしつで しゅんたろうくんが

せんせいに いった

ぼくが せんせいに おこられた。



☆どうして けんかになつて しまったのでしよう。

☆ゆうきくんが しゅんたろうくんを しんぱい している ところに、
せんを ひきましよう。

☆ゆうきくんが ごめんと いおうと おもつたのは、どこだと
おもいますか。

☆せんせいに おこられた とき、ゆうきくんは こころの なかで、
どう おもつて いたでしよう。

☆みんなも ゆうきくんの ように、こころの なかで おもつて いるのに、
いえなかった ことは ないですか。

ごめんと いえんだ (小学校低学年向け)

A 教材設定の意図

低学年の子どもたちは本来、いろんな場面で互いに激しくぶつかり合う。その中で、互いの心の内を知りやがては人と人とのつながりをつくっていく。

しかし、現実には、教師を含め私たちおとなは、問題が起こったとき、その現象面ばかりに目がいつてしまう。そして、問題事象をなくすことに腐心するあまり、ときにはその行動を身勝手と決めつけ、おとなの論理で子どもたちの思いをおさえこんではないだろうか。自分の思いを訴える場を失った子どもたちは、心を閉ざし、疎外感にさいなまれる。そうしたことの積み重ねが、今日の子どもの心の荒れの一員になっているように思えてならない。

問題が起こったとき、それを子どもからの問題提起と考え、子どもの本音の部分を語らせ、教師も周りの子どもたちもその思いに寄り添いながら、互いの理解を深めよう。このようにして初めて、人権教育の目指す互いに学び、励まし合う人間関係の基礎が次第に築かれるのではないだろうか。

本教材をもとに、言おうと思っても言えなかった学級の仲間
の思いを、一つでも二つでも共有させたい。

B 教材の解説

一年生の二学期初め、そのクラスでは「自分のなやんでいる

こと」をみんなでお話しようという学級会が開かれた。初めに先生が、小さい頃のけんかで、自分の悔しい思いをだれにも分かってもらえなかった体験を話した。すると、ゆうき君が「ぼく、ごめんといえんだことがあった」と切り出した。その話を先生が「いい聞いていくと、この教材文のようなゆうき君の思いが出てきたのだった。」

先生は、しゅんたろう君の言い分だけを聞き、ゆうき君には「本当に押しつけたの？」とだけしか聞かず、無理やり謝らせてことを終わらせていたのだった。しかし、ゆうき君は、泣いてしまったしゅんたろう君のことをずっと気にかけて、心の中ではすでに謝っていたのである。

先生がゆうき君に、「先生におこられたとき、どんな気持ちでしたの？」と尋ねると、「先生のこと、はがれと思った。そして、しゅんたろう君、大丈夫やったんやな、と思った」と話してくれた。担任に自分の思いを分かかってもらえなかった悔しさとともに、しかられてもなおしゅんたろう君のことを気にかけていたゆうき君の思いが伝わってくる。

この話し合いの後、ゆうき君がそのときの思いを「いいに思いだし、書いてきたのがこの教材文である。」

その後、先生はその作文を学級に返しみんなで読み合った。ゆうき君も満足そうだったし、しゅんたろう君も照れながら笑顔だった。

ゆうき君がみんなの前で自分の思いを語り、それをさらに綴

ってくれたことよって初めて、ゆうき君の悔しさも、やさしさも、担任を含めた学級のみんなで共有できたのである。

子どもたちは、毎日の生活のいろんな場面で行っていることを感じている。その中には、心の中にそっとしまわれていることもたくさんあるだろう。心の中で暖められてやがて生きていく上での肥やしになるものもあるだろうが、分かっただけならえなかった悔しさが積み重なって、仲間との距離を徐々に引き離していく思いもあるだろう。

放っておけばそうなりかねないゆうき君の思いを、担任がうまく引き出し、それをクラスの仲間に戻していくことよって、「ああ、あの時ゆうき君はあんな思いでいたんやな」と、その時語れなかったゆうき君の思いを子どもたちに感じ取らせることができたのである。こういうふうにして友だちのくやしさを、やさしさをみんなで共有することをいねいに積み重ねていくことよって、子どもたちどうしのつながりが深められていくのである。

C 指導上の留意点

① 思っているのに言えなかったことを出させる場合、決して、大人の論理や善悪で評価せず、本音で語ったり、書いたりしたことを評価し、励ましてやりたい。また、本音で語れるような雰囲気や人間関係を日頃からつくっておきたい。

② 「階段で人を押すことは危険である」とか、「けんかの話」に終始しないよう、いろんな場面の具体的な思いが語れるよう、留意して授業を進めていきたい。

③ 所々に方言が使われているが、子どもたちがわかりにくい場合は、その地域の方言に直すとよい。

④ 後日、「まとめ」で子どもたちが書いた思いを学級で読み合い、学級の仲間の思いを共有し合ってほしい。

D 参考

・一九九四年度人権週間取り組み報告

津田康則（辰口町立宮竹小学校）

本教材を使った授業から

◆資料中の指導案の流れに沿って展開したところ、本音の部分が出た。身勝手ともとれる行動の中に、今の子が置かれているものもろのストレスめいたものを感じた。

まとめとしての「自分にもゆうき君のようなことがなかったか」の文章化では、本音がけっこう出されていた。その本音を生かして今後につないでいきたい。（羽咋）

◆読後「悔しい気持ちを分かっただけならえなかったことある？」と切り出したところ、一人の子が先生に叱られたことを綴ってきた。「聞いてもらった」ことでわだかまりが少しは解けてくれればいいなあと思った。（羽咋）

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>① みんなはけんかしたことがありますか。</p> <p>二 展開</p> <p>② 「ごめんといえんだ」を読みましよう。</p> <p>③ どうしてけんかになってしまったのでしよ う。</p> <p>④ ゆうき君がしゅんたろう君を心配している ところに線を引きましょう。</p> <p>⑤ ゆうき君がごめんと言おうと思ったのはど こだと思えますか。</p> <p>⑥ 先生におこられたとき、ゆうき君は心の 中 でどう思っていたでしょう。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑦ みんなもゆうき君のように心の中で思っ ているのに言えなかったことはないですか。</p>	<p>① 毎日けんかをしているであろう低学年の子どもたち。ここでは、けんかを善悪でとらえるのではなく、自分の思いを素直に表現できる雰囲気をつくっておきたい。</p> <p>② 場面をしっかりとイメージさせる。</p> <p>③ ゆうき君にも言い分があることをおさえる。</p> <p>④ しゅんたろう君のことが気になってしょうがない、ゆうき君の気持ちをおさえる。</p> <p>⑤ ゆうき君の葛藤に目を向けさせる。</p> <p>⑥ 自分だけ叱られたゆうき君の心の中を考えさせる。また、ほんとうはしゅんたろう君のことを心配していたんだということに気付かせたい。</p> <p>⑦ 一見勝手ととれるような思いも自由に書かせ、子どもたちの本音の部分を引き出した。</p>